

【論 文】

ハインリヒ・テオドール・レッチャーにおける俳優のための音声理論について ——ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語思想を手掛かりに

The Influence of Wilhelm von Humboldt's Philosophy of Language on
Heinrich Theodor Röttscher's View of Spoken Language for Actors

山 崎 明日香
Yamazaki Asuka

目 次

1. 導入
2. ドイツにおける言語ナショナリズムと俳優の話し言葉の関係
3. 音声と民族——標準語と方言の関係をめぐるレッチャーの言説
4. 音声の純粹化について
5. 音声の支配——俳優による音声操作の可能性について
6. 結論

要 旨

18世紀末以降のドイツ演劇界では、言語ナショナリズムの高揚や俳優の超地域的な活動に伴い、俳優の語り言葉の純粹化と標準語化が推進されてきた。20世紀初頭には、俳優の発音が政治文化的な綱領に上ると同時に、国民の言語教育の模範として推奨される。本論考はこの潮流に影響を及ぼした演劇評論家ハインリヒ・テオドール・レッチャーの『劇的演技術』(1841-46)において提唱された俳優のための音声論を対象に、その理論化の基盤に援用されたヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語思想の受容とその影響を考察するものである。その際に、①「音声と民族」、②「音声の純粹化」、③「音声の支配」という問題圏に焦点を当てて検証する。19世紀を通じた俳優の公的でナショナルな主体形成の進展において、この演劇評論家は、俳優の舞台言語を社会文化的また国民模範的な美的記号として理論化したのみならず、俳優の聴覚メディアとしての機能を強化したのである。

1. 導入

本稿は19世紀のなかばに活躍した演劇評論家ハインリヒ・テオドル・レッチャー (Heinrich Theodor Rötcher, 1803-1871: 以下, レッチャーと表記) の著書『劇的演技術 (Die Kunst der dramatischen Darstellung)』(1841-46: 以下KdDと略記)¹⁾のなかで提唱された俳優のための音声理論を対象に, その理論化に援用されたヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) の論考『言語構造の差異とその人間の精神的発展に及ぼせる影響について (Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschichts)』(1830-1835, 以下『カヴィ語研究序説』, 略号KE (Kawie-Einleitung) と略記)²⁾を手掛かりに, その分析と検証を行うものである。

レッチャーは, ベルリン大学のヘーゲルのもとで学位を取得した後, 1825年から1830年まで同大学の私講師として勤務した。その後, 1845年までボンベルクで教師として勤めた後,³⁾ 1863年までベルリンを拠点に演劇評論家として活躍する。彼は「レッシング以来の批評家」と呼ばれ,⁴⁾ また作家ヘッベルからは「オリンポス」と称えられるなど,⁵⁾ その深い学識に基づく哲学的な演劇批評は幅広い読者を獲得した。このように同時代の演劇界で広範な影響を及ぼしていたレッチャーは, 1844年以降, プロイセン政府の委託を受けて公的に演劇評論活動を行うことになる。本稿で取り扱うレッチャーの『劇的演技術』は, 演劇と俳優と演技術全般について論じた包括的な理論書であり, 俳優教育のための規範書として見なされた。⁶⁾

レッチャーはこの著書のなかで, 18世紀以降の話し言葉についての問題意識を受け継ぎながら, 俳優のための音声について論じている。そしてこの考察で印象的であるのは, とりわけ純粋ドイツ語の礼賛と方言の排除という排他的でラディカルな主張である。従来の研究では, この演劇評論家の音声理論を, ドイツの標準語形成運動に関連づけて考察してきた。なかでもWeithaseは, レッチャーの言語観を, ドイツにおける語り言葉の歴史と変遷のなかに位置づけている。⁷⁾ さらに, Jürgen Heinは, レッチャーの喜劇における方言の排除の主張に注目した。⁸⁾ しかしながら従来の研究では, レッチャーが, 同時代に影響を及ぼしたフンボルトの有機体的言語思想に依拠しつつ, 俳優を模範とした話し言葉とその音声について論述した重要性について, 考慮されてこなかった。

第一節で詳述するように, 近代ドイツ語圏の演劇界では, 俳優の話し言葉についての議論が高まった。道化師ハンスヴルストの追放から開始した演劇改革によって, 俳優は各都市で通じる共通の発音を得ることに意識を向けた。ウィーンのブルク劇場は優れた発音を習得していた最高の俳優たちを揃えていたが, まさにそのことによってこの劇場はさらなる名声を獲得したのである。⁹⁾ 19世紀の演劇界の著名な俳優ゾフィー・シュレーダーも, この例外ではなかった。彼女はブルク劇場の看板女優として活躍していたが, その卓越した朗読術によって, 観客から賞賛されていた。¹⁰⁾ 俳優が方言を排した純粋音声を支配することは, もはや不可欠な演劇的課題となった。このようなドイツ語圏における俳優に対する音声重視の演劇政策のもとで, レッチャーは彼の演劇論において, 従来の俳優のための

朗読術の指南書には見られなかった、フンボルトの言語思想に依拠した音声理論を打ち立てた。

言語学者であるJürgen Trabantの分析によると、ドイツにおける言語哲学の議論が「音声中心主義的 (phonozentrisch)」な傾向を帯びるのは、1770年から1830年にかけてのことであり、これはヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダー (Johann Gottfried von Herder) の『言語起源論 (Abhandlung über den Ursprung der Sprache)』(1772) の出版から、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) の『エンチクロペディー (Enzyklopädie)』(1817-1830) の出版までを、その区切りとしている。この時代において自身の言語哲学を発展させたフンボルトの言語観は、同じく音声中心主義的な特徴を示しているという。¹¹⁾ Trabantは、とりわけフンボルトの言語観の特徴を、次の三点に帰している。¹²⁾ 第一点目は「音声 (phoné)」であり、ヘルダーの定義した動物的で内的な音声、すなわち内面の目印であるその音声を、分節化された正しい音声で発話することである。そして第二点目は、「聴覚的な反省 (auditive Reflexivität)」であり、発話された声を、発話者が自身の言葉の中で認識し、自身で聞き取ることである。そして、第三点目は、「言語実用的な受容と相関関係 (pragmatische Rezeption und Reziprozität)」であり、言語構成的な点である。これは、他者が聞くことと自己が他者の声を聞くことが、思考を言語的に統合するという「聴取的統合 (akromatische Synthesis)」を満たすとされている。

こうしたフンボルトの音声中心主義的な言語体系は、レッチャーにとり格好の参照すべき対象となった。レッチャーは同時代のプロイセン知識人の音声理論に依拠することで、従来まで理論的に叙述されてこなかった俳優のための音声理論を構築したのである。従って、このフンボルトの理論的影響が、俳優を対象にしたこの著名な演劇評論家の音声理論にいかにか反映し、その展開をみたのかという点を検証する必要がある。

本稿の第一節では、まず18世紀以降のドイツの標準語形成運動と、それに並行して議論されてきた俳優の話し言葉についての問題を概観する。そしてレッチャーが、俳優の音声を政治文化的また国民言語教育的な模範として公的に推進する際に、自身の音声理論をその後ろ盾の一つとして見なしていた点を指摘する。第二節では「音声と民族」という主題のもとで、音声とナショナル・アイデンティティー形成の問題について論じる。フンボルトはそのナショナルな言語観から、ドイツの統一的なドイツ語形成を担った人物として認識されており、¹³⁾ レッチャーの理論にその影響が見られることを具体的に検証する。そして第三節では「音声の純粋化」という問題を設定し、レッチャーがフンボルトの音声理論のなかから、とくに言語音と母音の純粋化という音声純粋化の理論を踏まえながら、独自の理論を構築していた点を論じる。さらにレッチャーが、音声中心主義的な舞台構想を実現するために、俳優を対象にした純粋音声の理論を構築したことを追求する。そして第四節では、「音声の支配」という視点からレッチャーの議論を分析する。レッチャーはフンボルトの提示した音声の概念表示の理論に依拠しつつ、俳優の音声支配のための演劇的また記号的な音声理論を構築した。さらに、そのことが同時代の演劇政策に沿っていた点について論じる。そして結論では、レッチャーのこの音声理論が、19世紀以降のニューメディア

ア時代における俳優の新たな課題に接続している可能性を提示する。

2. ドイツにおける言語ナショナリズムと俳優の話し言葉の関係

18世紀のドイツ語圏では、啓蒙主義と合理主義が進展し、伝統的な貴族主義的また旧来の学術主義の支配が衰退した。これに応じて、宮廷言語であるフランス語と学術言語であるラテン語に対して、ドイツ語を国民の国語に制定することが議論された。これはドイツ語の文法、音声、正書法における全面的な体系化であり、その標準語化を意味していた。¹⁴⁾ 1787年に愛国的な学術機関「ドイツ・アカデミー (Teutschen Akademie)」の設立を構想した人文主義者ヘルダーは、ドイツ語の体系的かつ学術的な発展とその保護を訴えた。この言語思想家は、政治文化的また国民教育的な観点から、ドイツの国家形成に並行して、ドイツ語を「国民言語 (Nationalsprache)」として確立することを主張したのである。ヘルダーのこの言語ナショナリズムは、¹⁵⁾ ドイツの学校教育における話し言葉の習得の重要性を認識していた国家主義者アダム・ミュラー (Adam Müller) の主張のなかにも見受けられる。ミュラーは、方言に内包される国民の根源的な力と精神性を確信し、政治文化的な観点からドイツ語圏で通用する標準語の形成を強く推進した。¹⁶⁾

この知識層主体の言語ナショナリズムは、18世紀より先鋭化するが、このことは母語とナショナル・アイデンティティーの関係についての議論が、感情的かつ心理的な傾向を帯びてきた点にも関係している。¹⁷⁾ つまり、外国語とドイツ語の差異を明らかにし、ドイツ語に国民的性格づけを行うことで、国民の言語感情を高揚させ、共同体意識の醸成を志向する情動的態度の形成がみられたことを意味している。これに結びつくのが、ドイツ語の純粋性の維持と発展についての言語理論を唱導した排他的な言語純粋主義者の言説である。この代表的な論客であるエルンスト・モーリッツ・アルント (Ernst Moritz Arndt) とフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn) は、外国語を排したドイツ語の標準語形成の問題を、政治的イデオロギーにまで高めた。これは特にアルントの『国民の憎悪と外国語の使用について (Ueber Volkshafß und über den Gebrauch einer fremden Sprache)』(1813)のなかを表れている。¹⁸⁾

このようなドイツにおける「母語の神聖化 (Sakralisierung der Muttersprache)」¹⁹⁾ と呼ばれた言語浄化の過程のなかで、統一言語の形成運動の一翼を担ったのは、ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) である。彼は愛国的な政治演説『ドイツ国民へ告ぐ (Reden an die Deutsche Nation)』(1808)で名高く、「生きた言語」を高く評価していた。²⁰⁾ フィヒテは、ドイツの話し言葉を共同体の形成基盤とするナショナルな言語教育観を展開し、ドイツ語を運用した学校教育の普及を強く提唱した。フィヒテのこの態度表明は、母語を教育学の対象として体系化した近代的なプロセスと深く関わっている。Stukenbrockによると、17世紀から20世紀に至る「母語の教育学化 (Pädagogisierung der Muttersprache)」は、教授目的のためにドイツ語を洗練し、学校教育組織に応じてそれを実施することであった。²¹⁾ こうした近代の民衆啓蒙化に向けたドイツ語教育実践は、

19世紀に拡大した愛国主義や新人文主義、また学校の法的整備に乗じることで、組織的な強化を見ることになる。²²⁾

以上に論じたように、ドイツにおける標準語形成運動は、言語ナショナリズムや言語純粹主義の高揚だけではなく、母語の国民教育化という教育システムの確立に拠っている。そしてこの運動と不可分に推進されてきたのが、近代のドイツ演劇界における俳優の話し言葉の純粹化と標準語化である。そもそもドイツ語圏の演劇界において、俳優がいかに純粹な美しい言語で語るべきかという問題は、すでに18世紀以降、高名な俳優コンラート・エックホフ (Konrad Eckhof) や彼の演技術を継承したアウグスト・ヴィルヘルム・イフランド (August Wilhelm Iffland) の朗誦術の改革の試みに表れているだけではない。²³⁾ それはレッシングの『ハンブルク演劇論 (*Hamburgische Dramaturgie*)』(1767-1769) や、²⁴⁾ ゲーテの『俳優諸規則 (*Regeln für Schauspieler*)』(1803)²⁵⁾、さらに1800年頃に盛んになった「朗誦術運動 (Sprachkunstbewegung)」²⁶⁾ などで展開された様々な演劇的言説のなかで展開されている。

こうした新しい演劇美学の要請には、ヨハン・クリストフ・ゴットシェート (Johann Christoph Gottsched) の着手したドイツ演劇改革に発する18世紀半ば以降のテキスト中心主義への転換が、その背景に存在する。すなわちバロック時代における俳優の即興的な演技法から、スクリプトを優先する俳優の安定した演技法への転換である。特に1820年代以降になると、悲劇作品の台本の主流が韻文から散文へと移行する。そのことで、話し言葉に対する注目がより高まった。つまり、俳優の重厚な朗誦術に頼った上演から、心理学を考慮したより自然で音楽的な散文調の台詞回しを伴った上演へと移行するのである。さらに、19世紀に進展した交通網の発達により、俳優の超地域的な活動が促され、彼らの舞台言語に非地方的で均一的な特性があることが求められた。²⁷⁾

19世紀末になると、ドイツ語圏の舞台では、文化的に洗練された芸術言語が観客に提供される。例えばウィーンのブルク劇場では、国民意識の形成を目的として、舞台言語を洗練することが推進された。²⁸⁾ 俳優の発音は政治文化的な綱領に上ると同時に、国民の言語教育の模範として公的推進を受けるのである。これは、1898年4月にベルリン宮廷劇場で開催された舞台関係者、文献学者、そして教育学者による「ドイツの舞台言語の均一な規則についての協議 (Beratungen über die ausgleichende Regelung der deutschen Bühnensprache)」のなかで具体化される。この協議の決定事項によると、ドイツの舞台に対して規定の舞台言語の使用が要請された。この協議会の委員であった言語学者テオドル・ジープス (Theodor Siebs) は、この会議での議論を基に著書『ドイツの舞台言語——標準語 (*Deutsche Bühnensprache – Hochsprache*)』を出版している。ジープスは、「言語芸術家 (Sprachkünstler) としての俳優の洗練された舞台言語を高く評価していた。そして彼はその人工言語をドイツの標準語のモデルとして採用することに、「政治的な意味」を見出し、またドイツの「完全な統一」を進めるとしたのである。²⁹⁾ ジープスの政治文化的また国民言語教育的なこの試みは、当時のドイツ語教育の普及を強く推進していたドイツ帝国の教育政策にも関係している。この時代のギムナジウムの科目では、ドイツ語教科の年間時間数が増加した。この背景には帝国創建以来の経済発展期に応じて、近代語

と学術知識に基づく教育実施の必要性が高まった事情が存在したのである。³⁰⁾

そしてジープスのこの言語観に影響を与えた著作の一つとして挙げられるのが、本稿の考察対象であるレッチャーの『劇的演技術』である。ジープスは、自身の論考『ドイツの標準語の歴史について (*Zur Geschichte der deutschen Hochsprache*)』(1926)のなかで、次のように記している。

1842年に有名な文芸部員 (Dramaturg) のレッチャーが、彼の『劇的演技術』のなかで、次のことを簡潔に述べている。それは、話されるものの理想的で普遍的な内容は、伝達手段として同じく一般的で洗練された発音を必要とすることである。(Siebs, 1926, p.26f.)

このように、ジープスに言及されたレッチャーの音声観が、ドイツの標準語形成運動において、俳優の話し言葉の統一化とその模範化に際して理論的な後ろ盾の一つとなっていたことを、重視する必要がある。このことは、レッチャーの著作の続刊が、フンボルトの弟アレクサンダーに献辞されている事実にも表れている。レッチャーのこの野心的な著書は、政治文化的また演劇教育的な意図を有した著作であったのである。³¹⁾ 以上においてドイツ語圏で高じた標準語の形成をめぐる問題を概観した。この問題を踏まえ、本稿はまず演劇評論家レッチャーのフンボルト受容について述べた後、その音声理論を三節に渡り検証する。

3. 音声と民族——標準語と方言の関係をめぐるレッチャーの言説

レッチャーのフンボルト受容については、同時代に講演や著書の形で世に発表されていたフンボルトの研究成果のみならず、レッチャーが活動拠点を置いていたベルリン大学におけるフンボルト言語学派の影響が関わっていると推測される。また1829年には、ベルリン大学でフンボルトの有機体的言語思想から多大な影響を受けていたヘーゲル学派の非常勤教授カール・ヴィルヘルム・ルートヴィヒ・ハイゼ (Karl Wilhelm Ludwig Heyse) が、言語論の講義を開始している。³²⁾ これは当時、論理的言語学を展開することでフンボルトの言語思想を批判的に捉えていた言語学者カール・フェルディナント・ベッカー (Karl Ferdinand Becker) への対抗意識があったと見られている。³³⁾ ハイゼの言語観によると、言語は有機的存在であり、それは調音、すなわち分節化された明瞭な音声と、形成された概念との統合体だとする。このフンボルトの言語思想を敷衍したベルリン大学の言語学派全体の影響圏において、レッチャーはフンボルトの言語論を受容したと考えられるだろう。

レッチャーの『劇的演技術』の第一巻は、全四部より構成されており、そのなかの第二部の最初の部分が、「音 (Ton)」の考察に充てられている。そこでまず主題に挙げられているのが、標準語と方言の問題である。レッチャーの考察によると、俳優は方言ではなく、国民精神を体現する純粹言語で語るべきだとする。本節は、この俳優の語り言葉について

のラディカルでナショナルな言説を検証する。この分析に際して、「音声と民族」という主題のもとで、フンボルトとレッチャーの音声理論の比較分析を行う。

ドイツ思想史の研究者である齊藤渉は、カントの時代を中心とした前成説と後成説をめぐる発生理論に関する議論をもとに、フンボルトの言語観を詳細に検証している。齊藤の分析によると、フンボルトは「発声論的言語観」を有していた。³⁴⁾ フンボルトはこの言語観において、言語を「エネルゲイア (Energeia)」であり、各国民の固有性を反映するものであるとしている。「エネルゲイア」とは、アリストテレス哲学の中心概念であり、物事が完成する形態のことを表し、「現実態」と呼ばれるものである。そして、この主張は、1822年にフンボルトが言語の国民的性格の由来と形成を分析した論考『諸言語の国民的性格について (Ueber den Nationalcharakter der Sprachen)』に散見するのみならず、フンボルトが自らの言語観を深めることになった『カヴィ語研究序説』のなかでも、言語に国民的な性格が見出されている。そしてこの国民の差異は、「音声 (Laut)」もしくは「音声形式 (Lautform)」によっても、規定されている。

従って、音声形式こそが、それを通じて諸言語の差異を主として基礎づけるものであると説明することができる。このことは、音声形式の本性に拠っている。というのは、現実的に形成された具体的な音声のみが、実際において言語を形づくるのであり、さらに音声は必然的にむしろ同一性を自ら伴う内的な言語形式において生じることができるよりも、より遥かに大きな多様性を許すからである。(Humboldt, 1968, KE, p. 82)

フンボルトは、動物的で一時的な「叫び」の音声ではなく、分節化され明瞭になった音声である「調音 (Artikulation)」が、つまり、人間の精神によって構造化された「音声形式」のみが、人間の精神生活を成す言語にとって決定的に重要な構成要素であると見なした。フンボルトが重視したこの音声は、諸言語の構造的また根源的な差異を導く構成単位として認識されている。これは例えば、次のフンボルトの見解にも表れている。「音声形式は、[...] 言語の差異の、真に構成的で指導的な原理である。」(Humboldt, 1968, KE, p.52) またそれだけではなく、音声は、各言語を成立させる文法法則にも深く関連づけられている。この構造化を通じて処理された音声の非自由性と法則化の能力が、各言語の差異を明瞭にしているのである。そして、フンボルトの見解によると、音声は言語の相違性を生み出すと同時に、民族性の形成とその規定に結びつく。

音声形式は言うまでもなく、内面の精神力に密接に関係する人間の全ての有機体の部分として、同じく国民のもつ素質全体と厳密に関係している。(Humboldt, 1968, KE, p.52)

フンボルトによると、音声は各民族の言語の個性と性格を形成し、さらにその民族性と精神性に一致する根源的な要因である。ここには、音声と個人と国民との間の内的で有機

的な相互関係が構築されている。Clemens Menzeによると、このフンボルトの音声観は、比較人類学的言語観に基づいている。³⁵⁾そしてフンボルトの言語観によると、民族の個性はその固有の言語に反映するばかりではなく、さらにそれは言語の個性を構成するとしており、それは社会文化的また地理行動的な相違性を考慮した言語解釈である。このように、フンボルトは音声を諸民族の精神文化的差異を構成する基本的要素として把握しながらも、その音声と民族との関係を感情的また心理的な領域において展開する。これは次の箇所に示されている。

なにゆえ教養ある者や無教養の者にとり、祖国の言葉は外国語よりもはるかに大きな強さと親密さを有するのであろうか。そしてその言葉はそれを長く聞かずにいた人々の耳を、突然ある種の魔力でもって迎え入れ、そして遥かな憧憬を喚起するのはなぜだろうか。このことは、言語内にある精神的なもの、つまり表現された思想や感情に由来しているのではなく、それはまさに最も不可解で個人的なものに、つまりその音声に基づいていることは明白である。我々にとっては、その故郷の音声の響きを耳にすると、我々の自己の一部に接したかのような思いがするものである。(Humboldt, 1968, KE, p.59)³⁶⁾

フンボルトにとって、国民に固有の言語を構成する音声こそが、民族感情やその統一性を生み出す要素である。分節化された明瞭な音声は、人間の心理や感情に作用し、民族に共通の心象風景や親密なイメージ群像を喚起する。ここには音声とナショナル・アイデンティティーとの間の緊密な関係性が見出されている。音声は国民的差異の重要な指標であるだけでなく、その使用者に祖国を体験させ同一化を促す実装手段である。フンボルトにとって、音声はすなわち祖国であり、諸民族に対する心的地理化をなすものである。

それでは、フンボルトの提唱するこの「民族と音声」の不可分な有機的關係が、レッチャーにいかにか受容されたのかを検証する。レッチャーは、自身の音声についての考察のなかで、フンボルトに直接言及し、またこの思想家の考察を参照している。ここではレッチャーの言及を踏まえながら、フンボルトの言語思想の影響を前者に辿ることを試みる。まず次の引用を確認する。

様々な方言に定着した誤った発音を除くとしても、発音はそのような方言に依存していない他の普遍的な諸形式において現れる。それらの諸形式は、次のように理解することができるだろう。フンボルトの見事な表現に従えば、全ての調音が成立するのは、精神が発声器官を制御して、精神作用という形式に合致した音声を取り扱う発声器官に命じるからである。従ってどの明瞭な音声も、その発音を他の全ての明瞭な諸音声に結びつける内的必然性から、あるシステムに向けて生じることになる。そのシステムとは、その発音を生み出した国民の精神固有性に完全に一致する。それゆえ、ある国民の独自の言語性質は、最初に明瞭な音声システムに、つまりその言語本体に表れる。(Rötscher, 1919, KdD, p.82)

ここでレッチャーは、具体的にフンボルトの考察を参照し、精神作用を通じて明瞭化された音声である調音が、民族の固有性と密接に関係し、また民族精神を体现すると述べている。しかしながら、この音声と精神を関連付けた言語哲学的な音声解釈のなかで、レッチャーは、方言と民族的精神との間に断絶を見出している。さらにレッチャーは、このフンボルトの音声理論の基本的構造を踏襲しながらも、独自の観点からこの言語変種としての方言の排除を訴える。

それゆえ第二の重要な課題は、次のことに向けられている。つまり、ある種の方言にみられる明らかな誤りを除いて、明瞭な音声を不完全な権能へともたらずあらゆる異質な要素を取り除くことである。(Rötscher, 1919, KdD, p.82)

我々は、深く根付いた方言が俳優には明らかに障害であることを理解している。方言はある特定の地域の色彩を言語に与える。だが、それゆえ方言にとらわれた者は、国民の精神固有性から生じた形式のなかでは、精神内容を示さないのである。(Rötscher, 1919, KdD, p.76)

このようにレッチャーは、非常に強い調子で、明瞭な発音から異質な音声を除去する必要性を強調するだけではなく、異質な音声を地方的な言語に、また明瞭な発音を純粹言語にカテゴリー化するなど、両者を対照的な関係に置いている。さらにレッチャーによると、方言の音声は、国民の精神固有性とは無関係である。従って、方言は非精神的な言語であると否定される一方で、純粹言語の音声は、「国民の精神全体の活動 (die Arbeit der geistigen Gesamtheit der Nation)」(Rötscher, 1919, KdD, p.76) に結びつけられている。レッチャーは、この両変種の言語に対し、音声面と精神面で分離と序列化を行っているのである。

この点において、フンボルトも、音声と民族精神との間の有機的な内的関係を重視しており、明瞭な発音をその関係成立のための必然的な要素として理解していた。しかしながら、同じくフンボルトの行った古代ギリシアの各方言の分析に従えば、方言とはある言語の発声論的過程で必然的に生じた一変種であり、それは個性として認識されている。またそれだけではなく、この方言は、言語と国民の活力ある形成に必要な力であり、それゆえ方言の支配する言語領域内でも、人間の精神文化的また芸術的な豊饒さが生み出される。³⁷⁾ 従って、この思想家において方言を形成する音声は、決して調音化されない音声などではなく、すでに人間の精神作用を受けて体系化された音声形式である。この点がフンボルトの言語観を、同時代の排他的な言語純粹主義と分け隔てている一つの理由である。

以上のように、レッチャーは、比較人類学的観点から分析された、音声と民族の密接な関係についてのフンボルトの考察を取り上げ、音声を通じたナショナル・アイデンティティーの形成に注目した。純粹音声のみが、個人的差異を埋められる民族的な集合イメージや、共通感情を喚起することができる。音声に祖国を見出すフンボルトのこの音声観を、

レッチャーは自身の言語ナショナリズムに接続することで、同時に俳優が音声操作を通じて情動的に舞台効果を高めることを期待したのである。

またレッチャーは、フンボルトの定義した「明瞭な音声 (der artikulierter Laut)」の概念を、純粋ドイツ語と方言をめぐる自身の議論のなかへ導入した。レッチャーによると、方言は同じ民族の言語に属しながらも、その不純な音声のために、「遅れた地方の精神 (der zurückgebliebene Lokale-Geist)」(Rötscher, 1919, KdD, p.77) を体現し、国民精神の形成を妨げる。レッチャーは、舞台を国民のための道徳啓蒙的な教育の場とみなした。舞台上で語られる内容は、共通の人間のまた国民的な理想を志向するものである。この舞台作品の理念は、俳優個人の理念の解釈と伝達能力のみならず、彼らの国民統合的な発音を通じてのみ、完全に伝えられる。(ibid., p.78) レッチャーは、フンボルトの「民族と音声」に関する精神原理に依拠しながら、ドイツの話し言葉の音声序列化を行うことで、地方性を排した俳優の芸術言語の標準化と模範化を進めた。ここには、俳優を「国民的な音声の女性守護者でありいわば正典 (die Bewahrerin und gleichsam der Kanon des nationalen Lauts)」(ibid., p.80) とみなすことで、俳優の音声を絶対的なモデルとし、舞台を国民的な音の聖地とする、彼の政治文化的また教育啓蒙的なレッチャーの意図があったと言えるだろう。

4. 音声の純粹化について

民族と音声の関係について言語ナショナリズムの観点から論述したレッチャーは、彼の『劇的演技術』の「発音の美」の項目において、俳優の音声を理想化するための理論を展開している。その考察によると、国民の模範となる発音を得るためには、俳優はその最高の目的として、「調音の美 (die Schönheit der Articulation)」(Rötscher, 1919, KdD, p.83) を追求することである。この調音の形成には、明瞭で正確な音声の発音だけではなく、なかでも母音を中心とした音声の純粹化と、その適切な操作が重要であるとする。このレッチャーの音声の純粹化に関する項目では、フンボルトの『カヴィ語研究序説』のなかの項目「言語の音声システム。調音化された音声の本性」から多くの示唆を受けている。本節では、両者の「音声の純粹化」を扱った考察を比較分析すると同時に、フンボルトの理論に立脚し、自身の主張を展開したレッチャーの意図を併せて検証する。

まず、音声の純粹化という問題が、中世以降のゲルマン語圏ですでに提起されていたことに触れる必要がある。中世では、この広大な言語領域で通用する共通言語として、マイセン地方の言葉が「純粹」な言語として選ばれた。18世紀になると、この地方の言語変種を模範的な言語として官庁語に定めるといった言語史的また政治的な経緯が存在した。³⁸⁾ そして第一節ですでに論じたように、18世紀から19世紀に見られた言語純粹主義の言説において、母語と外国語の差異化と、それを通じたドイツ語の純粹性が、民族主義的観点から強調された。この主張はやがてヒューストン・ステュアート・チェンバレン (Houston Stewart Chamberlain) の人種主義的言説を取り込みながら、純粋ドイツ語の排他的な礼

賛へと導かれる。³⁹⁾ こうした言語ナショナリズムにおける急進的な言語純粹主義的な解釈は、フンボルトの『カヴィ語研究序説』には見られない。だが、この著書のなかでは、人間の言語形成の過程において音声の純粹化が構造的に起きており、とりわけ調音の形成には強い精神的な力が作用していることが示唆されている。

調音は、様々な言語器官に対する精神の制御に基づいている。すなわち、精神は様々な言語器官に、精神作用の形式に応じた仕方、音声を処置するように強いているのである。(Humboldt, 1968, KE, p.66)

フンボルトのこの有名な命題は、音声の純粹化を解明する際に核心となる論点であり、レッチャーにも引用されている。(Rötscher, 1919, KdD, p.83) フンボルトによると、人間的な音声は、音声形式の構成要素である「調音 (Artikulation)」へと洗練されるが、そのためには精神の介入を通じた純粹化の過程が必要である。⁴⁰⁾ だがこの命題以外にも、フンボルトは、音声の洗練化には、響き、言語音、音節、言語器官などの諸段階において、音声の純化が起きていることを考察している。これは、フンボルトの『カヴィ語研究序説』だけではなく、それ以前に執筆された著書『一般言語類型の綱要 (*Grundzüge des allgemeinen Sprachtypus*)』(1824-1826)のなかに認められる。フンボルトの考える音声純化の過程は、精密時計の内部構造のように複雑性を極めていのである。そして、フンボルトは、言語素材となる音声の純化について、次のように記している。

音声とそれにまつわる全ての不純な副次的な音声を切り離すことは、その音声を明瞭にしたり、それに伴う心地よい音を響かせるために、不可欠なことである。しかしこのように切り離すことは、音声を発話の要素にしようとする(精神の)意図から直接自然に流れ出てくるものなのである。そして、発話が真に活動的で、暗い動物的で混乱した叫びから自ら分かれたれ、純粹に人間的な衝動や人間的な意図の産物として際立ってくる、そうした時に音声は、すでに自ら純粹な状態で立ち現れるのである。(Humboldt, 1968, KE, p.67)

音声純化のプロセスに関するこの引用では、動物的で一次的な音声から、人間的な音声への移行が示されている。Frank Schneiderに指摘されるように、この最初の音声は、人間を動物に結びつけるヘルダーの音声観を反映しており、調音の基礎となるものである。⁴¹⁾ そしてこの前言語段階にある音声の純化は、人間を動物から隔てる最初期の過程であり、フンボルトの『一般言語類型の綱要』を参照すると、ここには「精神が動物的な音声を貫き通す (*der Geist den thierischen Laut durchdringt.*)」(Humboldt, 1968, GdAS, p.400)ことで、音声の純化が達成される。⁴²⁾

しかし、フンボルトによると、こうした純化された言語音に対しても、言語器官の生理的現象によって、さらに不純な音声が加わってしまう。その音声は、最終的には感覚器官である耳によって、純化された音として到達する。

このような発声器官の音声の相違とは無関係に、個々の調音には、それぞれ固有に見られる気音、歯擦音、鼻音などの副次的な音声⁴³⁾が、加わってしまう。だが、これにより音声相互間の純粋な分離が危機に晒される。つまり人間においては、正しい言語感覚が支配的な力を持っていることは、次の点において強力な証明になる。つまり、音声⁴⁴⁾が最も繊細な耳に混じることなく純粋にまた完全に響くように、一つのアルファベットのなかにそのような副次的な音声が含まれていても、この副次的な音声は、微妙な音声⁴⁵⁾を聞き分ける耳には、混ざり合うことなく純粋に響くように、うまく制御する仕組みが出来上がっているのである。これらの副次的な性質は、調音の基盤において生まれており、本来の基本音声と融合して変化を受けなければならないので、それ以外の無秩序な方法は徹底的に排除されなくてはならないのだ。(Humboldt, 1968, KE, p.67)

上記の引用によると、音声の純粋性を維持する制御が、音声純化プロセスのなかで機能している。音声から発話への段階においては、絶えず不純で副次的な音声が発生し混合する。だが、こうした不純な音声を除去するか、あるいはそうした不純なものを別の音声と混合させることで、言語器官においては純化された状態として、最終的には明瞭な音声として維持される。このようなフンボルトの音声調整機構の構想には、基礎音の純粋な分離と、概念の明瞭さに相関関係を見出した彼の認識論的音声観が反映している。

さらに、フンボルトの構想したこの音声純化のプロセスは、母音と子音の音節単位にまで及んでいる。音節は母音と子音の構成体であり、母音と子音が相互に規定し合うことで、音声⁴⁶⁾が形成される。この両者は、聞く者によってはそれらが分離不能な一体型となっており、人工的に分離することは困難を極める。フンボルトによると、音声にとって基本的な構成体である母音は、そもそも子音と同じ性質や機能を有するのではなく、母音にはより豊かな繊細さが付されている。これは次の引用に明示されている。

[...] というのは、母音は明らかに子音よりもより繊細で具体性をもたないからであり、それゆえ母音は内的な調音感覚を喚起して、従来以上の洗練されたものまで高めたのである。(Humboldt, 1968, KE, p.84)

フンボルトは、この母音の考察に際して、当時出版されたベルリン大学の著名な比較言語学者フランツ・ボップ (Bopp Franz) の文法理論書『比較文法 (Vergleichende Grammatik)』(1833) を援用している。ボップは各言語における母音の機能と法則についての比較分析を行ったが、フンボルトはこの分析を基に、子音に優る母音の機能と繊細さを主張したのである。⁴³⁾ このように、母音は、特に分節化という調音の段階で、自らの音声⁴⁴⁾を明瞭に洗練することになる。

しかしながら、こうした洗練化された母音は、母音同士の結合や、子音と結合する段階で、その純粋性を維持することが難しくなる。このことは、フンボルトが、一つ一つの母音の純粋な音節とその相互の分離を図ることを、言語形成のプロセスのなかで特に重視し

たにも関わらず、そうなることを考察している。これは下記の引用より伺える。

母音は、子音と同じく、相互が純粋に区別されなくてはならず、音節はこの二重の分離性を担わなくてはならない。言語を完成させたものにするには、その母音相互の区別が母音体系のなかで起きることが必要であるが、それを維持することはより一層難しいのである。母音は、単にそれに先行する音声ではなく後続の音声にも同じく結びついている。その後続の音声は、純粋な子音か、あるいはサンスクリット語のウィサルガか、またアラビア語の末尾を意味するエリフのような、単なる気音のこともあり得る。そして、とりわけ基本的には本来の子音ではなく、分節化された音声の二次的性質でしかないものが母音の後に結びついた時には、母音が語頭にくるときよりも、音声の純粋性が、耳に到達しづらくなる。そのために、幾つかの民族の書字法では、この点からみると、非常に不完全に表されてしまうのだ。(Humboldt, 1968, KE, p.68)

フンボルトは、ここで、母音の純粋性の維持を重視しつつも、ある言語体系のなかではそうした母音の純粋性を維持することが、母音と子音の接続によっては困難になることを示唆する。従って、フンボルトの考察した音声の純粋化とは、明瞭な調音を獲得するための、言語音と音声と音節の段階で行われる精神制御による純粋化システムとして構想されているものの、そこには絶えず混合しまた取り込まれる異質な音的要素があり、それが各言語の性質を規定し特徴となることが、理解できるだろう。しかし、そうした異質な音的要素を含む言語体系を考慮するにもかかわらず、調音の純粋化がフンボルトにより重視されるのは、彼の著書『一般言語類型の綱要』のなかで説明されているように、音声の純粋な区別によって、アルファベットがより大きな広がりをもつことができるというだけではない。フンボルトは、調音の純粋化に、国民的な言語形成の必要性を見出していたのである。

国民の言語形成の優劣を決する第一の要因が、言語器官と聴覚の鋭敏さや、美しい響きを感じ取る感情の繊細さであるとき、調音感覚の強さと純粋性の有無は、第二の重要な問題点となるのだ。」(Humboldt, 1968, KE, p.80)

ここで見られる通り、フンボルトが音声の純粋化を重視したのは、純粋音声の運用と精神の明瞭さを関連づけた、自身の言語思想の反映である。明瞭な音声から構成された言語は、国民の精神文化的な活動を推進する。そのため、原初的で動物的な「叫び」の音声から人間的な言語音へ洗練する過程や、精神制御を通じて音声をより美しい調音に仕上げるプロセスは、全てこうした国民の個性をつくる同一的で固有の音声を形成するための、重要な過程として構想されているのである。

それでは、このようなフンボルトの提示する音声の純粋化の複雑なメカニズムを、レッチャーはいかに受容し、展開したのであろうか。すでに言及した通り、彼はフンボルトの命題「調音は、様々な言語器官に対する精神の制御に基づいている。」を踏まえていた。またそれだけではなく、レッチャーは、筆者が本節冒頭で二番目に引用したフンボルトの

考察を自身の著書のなかに援用しながら、音声に関して次のように考察している。

明瞭な音声は自らそこから生じた様々な言語器官のなかで、自身の普遍的な差異を有している。今や明瞭な音声が、喉や舌やくちびるの部分の様々な違いによって作られた差異や明確さのなかで、自ら選り分ける。そして例えば、気音、耳ざわりな音、鼻音などがそこに入り込むことで、その言語器官の部分の差異にその副次音が発音に加わってしまうのだ。だがそのような時には、明瞭な音声の明晰さが拭い去られてしまうという、危機に陥ってしまう。つまり、そこには不純で不完全な要素を引き起こす発音が生じるのだ。(Rötscher, 1919, KdD, p.82)

レッチャーもフンボルトと同じく、言語器官の差異から生じた副次的な音声により、純粹音声に異質な音声が混合することを示唆している。レッチャーは、人間の有意義な精神活動を阻害する要因を、この音声の不明瞭さに見出しているのである。しかしながら、音声の純粹化の維持については、両者の違いが明らかになる。フンボルトにおいては、母音は自身の調音によって洗練化をするものの、母音同士の結合や子音と結合する過程において、異質な音声が混合する可能性を含ませていた。しかし、レッチャーは、こうしたフンボルトの観念を超えて、母音を音声浄化の本質的な要素として議論の中心に据えている。

母音のなかで、声は自らの原初的な自由のなかで現れる。その母音はその原初的な自由の直接的な流出である (Rötscher, 1919, KdD, p.84)

レッチャーの認識した母音は、音声の始原に通じる純粹な性質を有している。この原初的性格は、新プラトン主義的用語である「流出 (Erguß)」に見出すことが可能である。この点について、フンボルトは彼の著作のなかで、「言語は活動による産出物ではなく、非恣意的な精神の流出 (Emanation des Geistes)」であることを、新プラトン主義風の内容でもって説明した。齊藤は、この新プラトン主義的概念に、フンボルトの言語論が、近代的な「主体」をめぐる形而上学の枠内で構築された可能性を、留保付きで見出している。⁴⁴⁾ こうしたフンボルトの新プラトン主義的傾向を継承しつつ、レッチャーは上記の記述に見られる通り、これを彼の母音の純粹化の理論に関連付けたと考えられる。そしてこのような哲学的観点から把握された母音は、精神や理念と同格に扱われ、濁りやすい子音とは対照的に、音声の中で最も純粹性を内包するものとして位置づけられている。ここには最小単位の音声にまで精神性を見出すレッチャーの音声観が窺える。

さらにレッチャーは、この理念と精神を体現する母音のなかでも、特に音声「A」に、「音声の純粹性 (Reinheit des Tons)」(Rötscher, 1919, KdD, p.84)を見出している。

全ての母音の中で、Aは感覚的な力を最も示す。なぜなら、Aは既に述べた通り、その最も単純な開示において純粹で人間的な音であるからだ。(Rötscher, 1919, KdD, p.85)

このように音声「A」は、母音の中で最も原初的で、また純粹性と人間性を有すると定義されている。それゆえ俳優はこの「A」を意識して、自身の発声練習に取り組むべきであるとする。

同じく俳優に対しても、声に純粹さと響きを与えるために、母音をその自由な力の中で様々に響き渡らせる訓練を、同じく俳優に対しても強く勧める。歌唱に陥ることなく、この母音を純粹に発声し維持することが、俳優にとって必要な音声移動を行うための、最適な予備訓練となるのだ。(Rötscher, 1919, KdD, p.84)

ここでは母音の中でも特に純粹性の高いAを正確に発音することで、俳優の音声全体を、つまりその声自体を純化するというレッチャーの独特の音声観が提示されている。母音のもつ純粹化機能に対するこの高い信頼は、別の個所で述べられている通り、人間の精神形成物としての母音に意味があり、それが正確な発音を通じてのみ表出される。(Rötscher, 1919, KdD, p.85) レッチャーは、音声の元来の純粹性を踏まえ、その原点回帰として音声の洗練化を説いたのである。

以上のように、レッチャーは、フンボルトの音節に内包された音声システムの構想に示唆を受けつつ、母音の純粹化機能を、つまり要素次元における音声純化の構造を打ち立てた。このようなレッチャーの音声純粹主義的な観点は、俳優に対して、理念であるテキストの単なる媒介者ではなく、その音声固有の純粹精神を体現する者としての、音声次元での意味生産を行う新たな課題を示している。俳優は文字テキストに従属するのではなく、それを音声的また精神的に再構成し、国民的に同一の調音を介してその音声テキストを表現する。この二重の理念の産出者としての、俳優の文字テキストに対する積極的な書き換えを、レッチャーは、フンボルトの音声純粹化の理論を導入することで実現した。Jürgen Trabant の考察によると、フンボルトの言語理論は音声中心主義的であり、それは「伝統的な視覚的で目を中心とした（自己中心的なsoliptistisch）認識論から、聴覚的で耳を中心にした（対話的なdialogisch）認識論への重要な移行の一步」である。⁴⁵⁾ フンボルトは、伝統的な視覚中心の認識論から、音声中心の認識論への移行を試みたが、レッチャーは、このフンボルトの新しい言語思想を基に、テキスト中心主義的な舞台から、俳優を軸にした音声中心主義的な舞台構成への転換を志向したのである。

5. 音声の支配——俳優による音声操作の可能性について

俳優の指南書として執筆されたレッチャーの『劇的演技術』の「音声」を扱った項目においては、模範的な発音の習得方法や、音声構造の説明に主眼が置かれている。こうした俳優のための独自の音声論のなかで、音声の民族的性格とその純粹性の維持が重視されていることを、本稿はこれまでの節の中で検証してきた。これらの結果を踏まえ、本節では

「音声の支配」の問題に焦点を当てて、レッチャーの考察した音声と意味との記号学的関係を分析する。レッチャーはこの考察に際して、フンボルトの『カヴィ語研究序説』のなかの項目「言語の音声システム。概念のもとでの音声配置」の研究成果に大きく拠っている。本節ではこの前提を踏まえ、レッチャーの考察した音声と概念、音声と意味、さらに俳優の音声支配とそれを通じた観客に及ぼす作用について検証し、さらにその理論化の背景を追求する。まず、フンボルトのこの著書のなかで、言語形成にまつわる音声の作用を分析した箇所を引用する。

個々の音声の対象と人間との間に入り込んでくるように、人間と、内外から人間に影響を及ぼす自然との間には、言語全体が現れる。人間は対象の世界を自己に取り込み、それを再構成するために、自己の周りを音声の世界で取り囲んでしまうのである。(Humboldt, 1968, KE, p.60)

フンボルトはカントの認識論の影響のもとで、言語成立のための一連のシステムを構想した。⁴⁶⁾ それは、主観的知覚で把握した対象の印象を、悟性を通じてカテゴリー化した客観化を行うことで、その印象を全体の統一へと導くことである。この言語形成過程において、人間が対象を知覚するために、音声は構造的に不可欠な媒介物として認識されている。音声は外的世界の印象を最初に取り込み、その上で人間は自身の精神世界を構築し自己形成を成し遂げる。フンボルトは、ここで音声の対象の知覚と把握の能力について概観しながら、音声の自己と対象に対する支配的な力を示唆している。この音声の作用は、音声と概念の結合により「言葉 (Wort)」が成立するという、音声の中心的な機能に関連づけられる。

様々な言葉は、各概念の記号として理解されている。音節は音声の統一を形成する。そしてその音節は、しばしば複数の音節が結合された意味を自ら持つようになった時、ようやく言葉になるのだ。それにより、言葉の内にとにかくも音声と概念の二重の統一が起きる。これにより、その言葉は発話の真の要素になるのだが、これは意味を欠いた音節は、本来は発話の要素として数えるわけにはゆかないからである。(Humboldt, 1968, KE, p.72)

ここで見られる音声と概念の「統合 (Synthese)」により言語が成立するという言語観は、ソシュールやパースなどの現代ヨーロッパの言語学に支配的な記号論的言語論に接近している。⁴⁷⁾ フンボルトの言語思想においても、言語の成立は、音声形式と内的言語形式の統合に帰されており、彼の記号論的言語観が窺える。このフンボルトの言語思想を記号論的言語観点から読み解く試みには、様々な議論が生じており、例えば、Schmitterの研究成果に加えて、Trabantは、フンボルトの言語思想をヨーロッパの伝統的な記号論的言語論を継承するものとして位置付けている。⁴⁸⁾ そしてこうした言語観を反映し、言葉の構成素材として選抜されるのは、無内容で本体なき音節ではなく、意味を有する内容ある音節で

ある。この意味づけされた音節、つまり音声のみが、感覚への印象喚起を行うのである。

さらに、この「音声とその意味との関連性 (Zusammenhang zwischen dem Laute und dessen Bedeutung)」(Humboldt, 1968, KE, p.76) について、フンボルトがさらに分析を加えた個所が散見する。ここではその一部を抜粋する。

音声システムの見地からすると、ある言語の優位性は、言語器官と耳の繊細さ、および音声に最大の多様性と完全な形成を与える素質を別にすると、挙げてその音声の意味に対する関係のなかにある。全感覚に対して同時に現れる外的な対象と感情の内的な運動が、単に耳への印象によって提示されることは、個々の微細な点について考えれば、ほとんど説明できない処理である。(Humboldt, 1968, KE, p.75f.)

フンボルトは、言語の精神全体を体現する卓越した性質を、その音声と意味の有機的結合に見出している。これは音声の主観的知覚で対象を客観化すると同時に意味を摂取することで、その対象を概念化し、言葉として提示するプロセスである。さらにこの音声と意味の統合、すなわち音声の概念表示により、感覚的に把握された対象と内的感情が、同時に喚起されるメカニクな現象が起きている。この言語を通じた自己を取り巻く世界の客観化の過程において、音声の意味作用はその本質的な土台となる。そしてフンボルトによると、この音声の概念表示には、三種類の方法が存在する。⁴⁹⁾つまり、言語の構成に際して、音声を直接的また象徴的に模倣する方法か、あるいは類似的に概念を表示する方法である。この音声の概念表示を機に音声は意味を獲得し、対象の客観的な概念化が可能になる。フンボルトにおけるこの音声と意味との関係は、前言語段階の内部構造で起きる初期的現象として把握されるものである。

フンボルトは、この概念を取り入れた音声自身の力を評価した。それどころか、音声は言語相応の機能をもち、世界を人間と結合させ、悟性の働きと人間への刺激において補助的な働きをする。このフンボルトに見いだされた音声の大きな作用は、次の「精神操作に対する音声の相応性 (Die Angemessenheit des Lautes zu den Operation des Geistes)」(Humboldt, 1968, KE, p.55) における叙述のなかに確認することができる。

知的営為は単に悟性だけを働かせるのではなく、人間全体をも刺激するのであるが、このことは特に、人間の声のもつ音声によって促されるのだ。というのは、人間の声は生き生きした響きとして、生ある存在自身のごとく、胸から出てくるのであり、言葉なしに苦痛や喜び、嫌悪や渴望には、常に随伴するからである。そして声は、そこから生まれ出た生命を鳴り響かせ、声を受け入れる感覚のなかでささやきかける。これはあたかも言語そのものが常に、提示された客観と同時に、これによって生じる感覚を再現し、このような行為を絶えず反復しては、世界を人間と結合させるか、もしくは換言すれば、そのようにして言語が人間の自発性と受容性とを自己において結合するのである。(Humboldt, 1968, KE, p.54)

意味と結合した音声は、人間の自己形成のプロセスのなかで、外的世界の客観的認識のために、また人間的な感情の発露や、人間と外的世界を媒介する言語の代替媒体として機能する。こうした人間の精神活動に影響を与え、その世界観の確立を支える能力を音声に可能にするのは、その明瞭な音声の内包する意味作用である。知性的で客観的な「精神操作 (Operation des Geistes)」に対峙できる音声は、人間に精神的刺激を与える感覚作用を有するのである。

それでは、フンボルトの重視した言語の精神原理に基づく音声と意味との関係性や、人間や外的対象に対する音声の感覚的作用が、レッチャーの理論にいかん受容されまた展開されているのかを検証する。レッチャーは母音の純粋性について考察した後、母音と子音に表れる「象徴的な瞬間 (symbolisches Moment)」(Rötscher, 1919, KdD, p.90) について分析している。ここでは、まずこの音声と対象との関係性を分析した箇所を引用する。

(注：ある種の直観と個々の音声結びついた) 関係を、誰かが音声により多く取り入れることができれば、その発音はより直観に溢れて芸術的になるのだ。記号と表示との間の根源的な親縁性が必然的に存在するが、それは全ての言語形成が、対象の印象を音声の中で再現することに発しているからである。そして実際にどの音声も根源的に精神の産物として理解され得るのであり、その中で、人間は内的に経験された印象を、つまり対象の直観を具現化することを試みたのだ。(Rötscher, 1919, KdD, p.90)

ここでは個々の音声には、ある種の「直観」が含まれているとする。そしてこの「直観」は、別の個所では「象徴的な感覚 (symbolischer Sinn)」(Rötscher, 1919, KdD, p.90) や、「象徴的な要素 (ein symbolisches Element)」(ibid., p.90) と言い換えられていることに注意せねばならない。つまり、対象と音声の相互間における、主観的また直観的な象徴的要素の交換が成立している。実際レッチャーは、この箇所やそれ以外の箇所においても、フンボルトの考察した音声の模倣的また象徴的な概念表示の方法を参照している。(ibid., p.91)⁵⁰⁾ フンボルトによると、音声と対象との間に共通する第三の要素、例えば母音などの文字に定まった根源的また象徴的な意味を媒介として、概念表示が行われる。これは対象の印象が同一音声に表れるという点で、非常に多くの言語圏で見られる原始的また伝統的な表示方法であるとされている。(Humboldt, 1968, KE, p.76f.) そして、この音声の模倣性による対象の概念化において、音声は共通の「意味」を有することになる。レッチャーの場合、この「意味」が「象徴」に言い換えられていることに、注意せねばならない。そしてこの音声と対象との模倣関係を通じて象徴性を獲得した音声は、「精神の産物 (ein Produkt der Seele)」として評価されている。音声は自然の記号として認識され、その心的な意味作用の力が見出されているのである。

さらにレッチャーは、この音声の精神性、つまり「意味」であり、またその記号性を形成する意味を最終的に開示するのは、美的で正確な発音であるとする。

我々の進歩から生じるように、直観との音声の親和性を、つまり音声の意味を、同じ

く発音のなかで表すことが、紛れもなく発音の最高の課題である。しかしながら、このことは、記号の表示に対する関係を感じ取る象徴的な直観と、この直観に感覚的な存在を与える形成された力を、確かに推進するのだ。(Rötscher, 1919, KdD, p.91)

レッチャーによると、意味をもつ音声を発話することで、その象徴的な意味や直観が伝達され、さらに「精神に印象と像」(Rötscher, 1919, KdD, p.91)が伝えられるとする。ここで示唆された音声の感覚的また直観的な力の源泉は、音声自体に内在する象徴的瞬間であり、また対象を概念化する表示機能である。そして考慮に値するのが、「記号の表示に対する関係」を支えているのが音声の意味作用である傍らで、その作用の調整を「美しい調音」が担っている点である。フンボルトの場合、音声の意味を提示するのは、音声形式の内的機構で形成された純粹調音である。レッチャーはこの構想に基本的に沿いながらも、音声の意味伝達の議論に、調音使用者の個人的で美的な行動観点を導入している。つまり音声の使用者と受容者との間での、意味内容の伝達精度を基準にした美的なコミュニケーションの具体化と、その背後の音声の意味操作性が視野に含まれているのである。この点に関して、俳優は自身の「道具 (Instrument)」である調音により、音声の支配を行うとするレッチャーの言及に関連性を見出せる。

上品で教養ある発音は、音声本体をその全体の広がりの中で、自由に支配することを示す。その発音を得るために努力しなければならないのは、俳優以外のなにものでもない。俳優の最も優れた道具は明朗な音声なのだ。それゆえに我々の芸術の根本的な教育は、発音から本質的な規律を作り上げることになるだろう。[...]美しく純粋な発音の支配者たるべき者は、その明瞭な音声の有機体が、その細分化や、深遠な法則におかれた音声の形成と音声の変化にまつわる生の過程にあることを、見通すであろう。(Rötscher, 1919, KdD, p.90)

レッチャーによると、俳優は象徴的記号である音声の優れた発信者であるべきである。これは音声を媒介にした記号と表示との関係に、俳優自身を回収することである。俳優は自己の音声操作による概念支配を行い、その被対象との間に記号的関係を形成する。この操作を通じて、演劇効果を高めることが要求されているのである。ここには従来の朗誦術には見られなかった、フンボルトの近代言語哲学を踏まえた俳優のための記号言語学的な音声解釈がみられる。そもそも文化システムとしての演劇は記号の集合体であり、俳優の言葉や音声もその記号的な演劇世界を構成する要素である。⁵¹⁾だがレッチャーは、俳優自身にこの音声の精神原理とその記号的構造を認識させることで、テキストを超越した俳優の音声面での主導性を確立させることを試みた。それは俳優の調音に個体的な差異を容認するのではなく、その調音を国民統一的な美的記号として規定することで、俳優の音声支配を容易にすると同時に、彼らの声を国民のナショナル・アイデンティティー形成の道具にすることを強化したのである。

これに関して言えば、レッチャーが1859年に刊行した彼の論考『演技術におけるヴィル

トウオース性 (*Das Virtuosenenthum in der Schauspielkunst*)』を参照することができるだろう。彼はこの論考のなかで、19世紀フランスの芸術界を中心に流行した近代的現象としての「ヴィルトゥオース(Virtuose)」を対象に、その商業主義的性格を分析している。ヴィルトゥオースとは、芸術分野の巨匠あるいは達人の総称のことである。レッチャーは、その技巧的で華美な演技術を批判し、それを個人の技術に依拠した「身体と音声の完全な征服 (die vollständige Unterwerfung des Körpers und des Tones)」と呼ぶなど、ヴィルトゥオースを芸術の本来の目的に反した非個人的な技術として否定した。⁵²⁾ レッチャーによると、真の芸術家とは、巧みな朗誦術を駆使して観客に一時的な脅威や奇異を提供することなく、また芸術を個人的な目的に還元することもない。真の芸術家とは、自身の自然や精神の豊かな才能をもとにして、真と美を伝える音声を創造する。この見解にみる通り、レッチャーは、音声に内包される根源的また民族的な意味の認識を俳優に伝えと同時に、俳優全体の音声運用技術を向上させ、俳優の芸術家としての公的意識の確立を期待したのである。

すでに第一節で言及した通り、19世紀を通じて演劇の上演舞台がドイツの語り言葉の模範になった。またこの背景には、プロイセン政府の教育政策のもとで実施されたドイツ語による朗読術の学校授業への導入が見られたことも指摘することができるだろう。このようなドイツの標準語形成運動のなかで、俳優を取り巻く環境変化が起きていたのである。この時代において、レッチャーの音声論は、国民的な言語教育を視野に収めながら、舞台言語の価値を高めることに貢献した一つの理論書であったと言えるだろう。しかしながら、俳優が国民標準的な美的記号としての音声を支配することは、逆説的に彼らの声を共通の「道具」として、演劇産業への商業的な投入を容易にするという結果をも導いたのである。

6. 結論

レッチャーの『劇的演技術』は、そもそも1843年にヴィーンで刊行されたヴィルヘルム・ヘーベンシュトライト (Wilhelm Hebenstreit) の『演劇制度 (*Schauspielwesen*)』に対する反論書として執筆された。⁵³⁾ この論争的な著書の内容は、俳優の社会的また職業的地位に対する偏見と蔑視に満ち溢れ、多くの誤解を含んでいた。少し前の時代には著名なドイツ人の俳優イフランドに認められるように、教養市民層出身の俳優の活躍が見られたのみならず、例えば大劇場であるブルク劇場と専属契約を結び、高額な報酬を得ていたスター階級に属する高名な俳優たちも多く存在した。俳優の社会的地位に対する偏見に溢れたこの著書に対抗し、ヘーゲル学派のレッチャーは、俳優とその芸術性について、哲学的また美学的観点から著述した。彼は、フンボルトの言語思想に依拠しながら、俳優に対する高度な教育啓蒙的な課題を見出すことを試みたのである。俳優はもはやテキストと観客との間の通信者ではなく、音声の象徴的意味を理解し、その純粹音声を使用することが望まれる。彼らは、テキストの音声次元での再解釈を行う精神的な意味生産者として、新たな芸術家像を獲得するのである。上演舞台において純粹調音で語ることは、観客のなかに国民

的また集合的な心象風景を喚起する。従って、この純粹調音の習得は、まさにドイツの話し言葉の国民的審級となるべく要請されることになった、俳優の最優先の課題として強調された。レッチャーが、フンボルトの音声中心主義的な言語思想に依拠したのは、何よりもこの俳優の聴覚空間の支配に向けて、統一的で美的な調音システムの構築が目指されていたからである。

これに関して述べると、19世紀末の録音媒体を始めとする産業技術の革新は、ドラマや朗読劇のレコード録音や、ラジオドラマの放送を実現した。このニューメディア時代における新たな視聴態度の形成は、視聴者に俳優の身体を介在させずに、テキストの音声受容を可能にした。それは同時に、俳優の身体から声の分離を生み出すことにつながった。俳優の音声は、この商業主義的な世界のなかで、次第に道具化されていたのである。このような時代において、テキスト中心主義から離反し、音声中心主義的な舞台構想を示したレッチャーの教育書の意義は、決して小さくはないだろう。録音技術を介することで、俳優の非身体的で無機質な人工音声が生み出される。そしてこの機械的な音声からも、視聴者に民族的な自己同一性を形成する感傷的な共通風景が提供されることになる。これらの現実は、「記憶と操作を原理的に一致」⁵⁴⁾させたフォノグラフの技術によるものだけではなく、俳優の標準化された純粹音声を通じた芸術作用にもよるのであるとするならば、未だに俳優と、その声とが未分化な時代に構想されたレッチャーの「俳優の音声支配」の試みが、確かに成功していると言えるだろう。もちろんその音声の支配圏は、彼が意図した上演空間的また同時的な領域にあるのではなく、録音技術の時代に実現した「時間的また空間的な制限を超越」⁵⁵⁾した、広大な領域にまで及んでいるのである。

謝 辞

本研究の成果は日本学術振興会の科学研究費補助金による助成を受けた。〔基盤研究(C)、課題番号: 26370382, 研究代表者: 山崎明日香, 平成26年度～平成27年度, 研究課題名: 19世紀ドイツ語圏における俳優の国民啓蒙的また言語教育的な役割についての研究〕。及び日本大学商学部の個人研究費(平成29年度)の助成を受けた。

注

- 1) 本稿では以下の版を使用し、頁数で引用箇所を示す。Rötscher, Heinrich Theodor (1919) *Die Kunst der dramatischen Darstellung*. Berlin: Erich Reiß. [略号: KdD]. なお、引用の日本語訳は、全て筆者による。
- 2) フンボルトのこの著書は、『カヴィ語研究』の序説として執筆された。本稿では、レッチャー自身の参照した1836年の版を参照しながら、以下の版を使用し、頁数で引用箇所を示す。Humboldt, Wilhelm von (1968) "Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des

- Menschengeschichts,” in id. *Wilhelm von Humboldts gesammelte Schriften*, ed. by Albert Leitzmann, Vol.7.1, Berlin: B. Behr (1907), Repr. Berlin: De Gruyter, pp.1-344. [略号: KE (Kawie-Einleitung)]. 引用の日本語訳については、次の邦訳を参照し、筆者が行った。[フンボルト, 1948, (岡田隆平訳); フンボルト, 1984, (亀山健吉訳)].
- 3) レッチャーに関するドイツ語圏での研究論文は少ない。本稿ではレッチャーの伝記的介绍と活動業績に関しては次を参照した。Cf. Klein, 1919 and 1928.
 - 4) Schröder, 1889, p.381; Klein, 1911, p.62.
 - 5) Klein, 1911, p.74.
 - 6) Ibid., p.53. このレッチャーの著書は、俳優たちから「聖書」と呼ばれた。Cf. Schröder, 1889, p.380.
 - 7) Weithase, 1961, p.517f.
 - 8) Hein, 2010, pp.235-248.
 - 9) Weithase, 1961, p.334.
 - 10) これに関しては、筆者の論考で検証した。Cf. 山崎, 2014, pp.125-126.
 - 11) Trabant, 1990, p.169 and pp.202-208.
 - 12) Ibid. p.183.
 - 13) Stukenbrock, 2005, pp.283-292; Kremer, 2007, pp.46-55; 亀山, 2012, pp.127-139.
 - 14) 18世紀から19世紀末のドイツ語圏の話し言葉に関する標準語形成運動に関しては、次の研究書を参照した。Cf. Weithase, 1961, p.334ff; Meyer-Kalkus, 2001, p.223-250; Stukenbrock, 2005, pp.157-170 and pp.241-305; Kremer, 2007, pp.25-75. また、Andreas Gardtの次の文献では、18世紀以降に言語がレトリックに関連づけられて議論されていた現象を取り上げている。その議論において、話し言葉の標準語化と方言の排除が主題にのぼった。Cf. Gardt, 1999, p.159f. and pp.169-171.
 - 15) ヘルダーの言語ナショナリズムは、1796年に行われた彼の教育演説にも表れている。Cf. Herder, 1810, pp.150-153.
 - 16) Weithase, 1961, p.385.
 - 17) Stukenbrock, 2005, p.245; Cherubim, 1983, p.174.
 - 18) Arndt, 1815.
 - 19) Stukenbrock, 2005, p.275.
 - 20) Kremer, 2007, p.57.
 - 21) Stukenbrock, 2005, p.163.
 - 22) 1807年から1815年のプロイセン政府の実施した教育改革期には、小学校の国立化が制定された。この教育改革では、新人文主義の教育理念を掲げたフンボルトの学校教育改革計画がその根幹に置かれ、ラテン語やギリシア語に並んで、ドイツ語の学校教育科目への採用が推進された。Martina G. Lükeによると、19世紀の啓蒙主義や理想主義の影響のもとで、ドイツにおけるドイツ語教育の実施が著しく進展する。この時代には、拡大する教養市民層の人間形成や自律化が目指され、母語やドイツ文学に対する知識の獲得が重視された。Cf. Lüke, 2007, pp.39-81. この理念に伴い、ドイツ語詩

- 作の朗読の授業が、小学校とギムナジウムで定着し始める。Cf. Meyer-Kalkus, 2001, p.226. また18世紀以降のドイツ帝国時代を中心とした学校制度確立とドイツ語教育の導入に関しては、次に詳しい。Cf. Ibid. pp.39-134.
- 23) Weithase, 1961, pp.336-346.
 - 24) Lessing, 1973, p.244.
 - 25) Goethe, 1998, p.860f.
 - 26) 1800年頃、朗読術に関する数多くの指南書が出版された。Cf. Meyer-Kalkus, 2001, pp.223-226. ゲーテの弟子の俳優ヴォルフも、俳優の純粋な発音の習得を主張した。Cf. Wolff, 1827, p.11.
 - 27) Knust, 2007, p.82.
 - 28) Peter, 2004, p.15-28.
 - 29) Siebs, 2013, p.4f.
 - 30) Lücke, 2007, p.93, 103 and 132.
 - 31) 1844年刊行の『劇的演技術』第二巻の冒頭に記されている。Cf. Röttscher, 1844.
 - 32) 言語学者Heyseに関しては、次の論考を参照した。Cf. Hassler, 1985, p.567f.
 - 33) Ibid.
 - 34) 齊藤, 2001, pp.120-124. また, Frank Schneiderは, フンボルトの「エネルギー」の概念の分析から, フンボルトの発生理論について考察した。Cf. Schneider, 1995, pp.224-231.
 - 35) Menze, 2000, pp.277-292.
 - 36) フンボルトの他の言及としては、次の引用が挙げられる。「人々は、どれほど遠くの過去がなお現在の感情に結びついているのかを、その言語のなかでより明白により生き生きと感じて予感する。というのは、言語は、昔の人々の感情によって貫かれ、また彼らの息吹を保っているからであり、またこの昔の人々は、我々の感情を表現するその母語の同じ音声において、国民的で家族的な親縁さを有しているからである。」(Humboldt, 1968, KE, p.62)
 - 37) Cf. Humboldt, 1968, KE, pp.182-184. フンボルトの方言に対する見解については、次に詳細に論述されている。Cf. Humboldt, 1968, KE, pp.180-184. さらに、フンボルトは、『諸言語の国民的性格について』のなかで、古代ギリシア時代の方言に反映する国民の芸術的創造力を読み取った。Cf. Humboldt, 1968, *Ueber den Nationalcharakter der Sprachen*, p.425.
 - 38) Siebs, 1926, pp.2-17.
 - 39) 18世紀から19世紀末にかけてのドイツにおける標準語の形成運動は、20世紀初頭に人種差別主義的な言語思想に結びついた。この問題に関しては、Kremerの前掲書のなかで主題として詳細に論じられている。Cf. Kremer, 2007, p.60-64.
 - 40) フンボルトの「調音」についての分析に関しては、次の文献を参照した。Cf. Borsche, 1981, pp.271-277.
 - 41) Schneider, 1995, p.235f.

- 42) 「精神がその動物的な音声を貫き通すことで、この音声は明瞭な音声になる […]」
(Indem der Geist den thierischen Laut durchdringt, wird dieser zum articulierten, [...]) Cf. Humboldt, 1968, *Grundzüge des allgemeinen Sprachtypus*, p.400.
- 43) Bopp, 1833, pp.107-113.
- 44) 齊藤, 2001, p.11.
- 45) Trabant, 1990, p.203.
- 46) フンボルトの言語思想におけるカント受容に関しては、すでに一定の研究成果が存在する。ここでの記述は次の文献を参照した。Cf. Borsche, 1981, pp.100-126; Schneider, 1995, pp.246-257; 齊藤, 2001, pp.120-142; Kremer, 2007, p.52.
- 47) Schmitter, 1977, pp.151-180. さらに、Schneiderは、フンボルトの言語形成システム全体に見られる「統合」について、分析している。Cf. Schneider, 1995, pp.231-245.
- 48) Trabant, 1990, pp.32-33. しかし、Trabantは同時に、フンボルトが個体の契機に注目し、言語に個人的解釈を含めることで、一律的な言語の道具的使用を拒否した非記号的言語解釈を行っていたことも指摘している。Cf.トラバント, 2001, pp.76-81.
- 49) この音声形式の概念表示に関しては、次の頁のなかで詳細に論述されている。Cf. Humboldt, 1968, KE, pp.76-78.
- 50) 「発音の美は、今やこの関係を耳に聞き取らせ、それによって早くも精神に印象と像を伝えようとする。フンボルトは適切な例として、次の表現 *stehen, stetig, starr* を示したが、これらの表現は、固定したもののイメージを我々に想起させる。また次の表現 *nicht, nagen, Neid* は、切り取られたものの明瞭な印象を喚起させる。」(Rötscher, 1919, KdD, p.91)
- 51) Fischer-Lichte, 2007, pp.7-20.
- 52) Rötscher, 1859, p.242. なお、Günter Oesterleは、レッチャーのこの論考を、近代の産業化と技術化に結び付けて考察している。Cf. Oesterle, 2006, pp.47-59.
- 53) Walzel, 1919, p.IX.
- 54) キットラー, 1999, p.60.
- 55) Meyer-Kalkus, 2001, p.213.

参考文献

- Arndt, Ernst Moritz (1815) *Ueber Volkshafß und über den Gebrauch einer fremden Sprache*. O.V.
- Bopp, Franz (1833) *Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinischen, Litthauischen, Gothischen und Deutschen*. Berlin: Ferdinand Dümmler, pp.107-113.
- Borsche, Tilman (1981) *Sprachansichten. Der Begriff der menschlichen Rede in der Sprachphilosophie Wilhelm von Humboldts*. Stuttgart: Klett-Cotta, pp.271-277.

- Cherubim, Dieter (1983) "Sprachentwicklung und Sprachkritik im 19. Jahrhundert, Beiträge zur Konstitution einer pragmatischen Sprachgeschichte," in Thomas Cramer (ed.) *Literatur und Sprache im historischen Prozeß. Vorträge des Deutschen Germanistentages Aachen 1982*, Vol.2, Tübingen: Niemeyer, pp.170-188.
- Fischer-Lichte, Erika (2007) *Semiotik des Theaters 1. Das System der theatralischen Zeichen*, Vol.1, pp.7-20.
- Gardt, Andreas (1999) *Geschichte der Sprachwissenschaft in Deutschland. Vom Mittelalter bis ins 20. Jahrhundert*. Berlin and New York: De Gruyter.
- Goethe, Johann Wolfgang von (1998) "Regeln für Schauspieler," in id. *Aesthetische Schriften. 1771-1805. Sämtliche Werke*, ed. by Friedmar Apel. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, pp.857-883.
- Hassler, Gerda (1985) "Zur Auffassung der Sprache als eines organischen Ganzen bei Wilhelm von Humboldt und zu ihren Umdeutungen im 19. Jahrhundert," in *Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung*, Vol.38.5, pp.564-575.
- Humboldt, Wilhelm von (1968) "Ueber den Nationalcharakter der Sprachen," in id. *Wilhelm von Humboldts gesammelte Schriften*, ed. by Albert Leitzmann, Vol.4, Berlin: B. Behr, 1905. Repr. Berlin: De Gruyter, pp.420-435.
- (1968) "Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschichts," in id. *Wilhelm von Humboldts gesammelte Schriften*, ed. by Albert Leitzmann, Vol.7.1, Berlin: B. Behr (1907), Repr. Berlin: De Gruyter, pp.1-344. [略号: KE (*Kawie-Einleitung*)].
- (1968) "Grundzüge des allgemeinen Sprachtypus," in id. *Wilhelm von Humboldts gesammelte Schriften*, ed. by Albert Leitzmann, Vol.5, pp.364-475. [略号: GdaS].
- ヴィルヘルム・フォン・フンボルト (1948) 『言語と人間——人間的言語構造の相違性に就いて』(岡田隆平 訳) 創元社。
- (1984) 『言語と精神——カヴィ語研究序説』(亀山健吉 訳) 法政大学出版局。
- Hein, Jürgen (2010) "„Amor war kein Stockerauer“. Über den Dialekt in der Posse," in Daniel Fulda, Antje Roeben, Norbert Wichard (ed.) „*Kann mann denn auch nicht lachend sehr ernsthaft sein?*“. *Sprachen und Spiele des Lachens in der Literatur*. Berlin and New York: De Gruyter, pp.235-248.
- Herder, Johann Gottfried (1810) "Von der Ausbildung der Rede und Sprache in Kindern und Jünglingen," in id. *Sämtliche Werke*, ed. by Johann Georg Müller. Tl. 12, Tübingen: Cotta.
- 亀山健吉 (2012) 『言葉と世界——ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究』法政大学出版局 (初版2000年)。
- フリードリヒ・キットラー (1999) 『グラモフォン・フィルム・タイプライター』(石光泰夫 他訳) 筑摩書房。

- Klein, Robert (1919) *Heinrich Theodor Röschers Leben und Wirken. Ein Beitrag zur Geschichte der literarischen Kritik*. Berlin (Selbstverlag der Gesellschaft für Theatergeschichte).
- (1928) “Heinrich Theodor Röschers ästhetische Grundansichten,” in *Archiv für Geschichte der Philosophie*, Vol.38, 1-4, pp.171-179 [Repr. ed].
- Knust, Martin (2007) *Sprachvertonung und Gestik in den Werken Richard Wagners. Einflüsse zeitgenössischer Rezitations- und Deklamationspraxis*. Berlin: Frank & Timme.
- Kremer, Arndt (2007) *Deutsche Juden - deutsche Sprache. Jüdische und judenfeindliche Sprachkonzepte und -konflikte 1893-1933*. Berlin and New York: De Gruyter.
- Lessing, Gotthold Ephraim (1973) “Hamburgische Dramaturgie,” in id. *Werke von Lessing*, Vol.4, München: Hanser, pp.229-720.
- Lüke, Martina G. (2007) *Zwischen Tradition und Aufbruch. Deutschunterricht und Lesebuch im Deutschen Kaiserreich*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Menze, Clemens (2000) “Nationalcharakter und Sprache bei Wilhelm von Humboldt,” in *Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik*, Vol.76.3, pp.277-292.
- Meyer-Kalkus, Reinhart (2001) *Stimme und Sprechkünste im 20. Jahrhundert*. Berlin: Akademieverlag.
- Oesterle, Günter (2006) “Imitation und Überbietung. Drei Versuche zum Verhältnis von Virtuosität und Kunst,” in Hans-Georg von Arburg (ed.) *Virtuosität. Kult und Krise der Artistik in Literatur und Kunst der Moderne*. Göttingen: Wallstein, pp.47-59.
- Peter, Birgit (2004) “Mythos Burgtheaterdeutsch. Die Konstruktion einer Sprache, einer Nation, eines Nationaltheaters,” in *Maske und Kothurn*, Vol.50.2, pp.15-28.
- Röscher, Heinrich Theodor (1844) *Die Kunst der dramatischen Darstellung*. 2.Tl. Berlin: Wilhelm Thome.
- (1859) “Das Virtuositentum in der Schauspielkunst,” in id. *Kritiken und dramaturgische Abhandlungen*. Leipzig: Wilhelm Engelmann, pp.241-249.
- (1919) *Die Kunst der dramatischen Darstellung*. Berlin: Erich Reiß [略号: KdD].
- 齊藤 渉 (2001) 『フンボルトの言語研究——有機体としての言語』 京都大学学術出版会。
- Schmitter, Peter (1977) “Zeichentheoretische Erörterungen bei Wilhelm von Humboldt. Vorstudie zum Problem der Integrierbarkeit von divergierenden Bedeutungstheorien,” in *Sprachwissenschaft*, Vol.2.2, pp.151-180.
- Schneider, Frank (1995) *Der Typus der Sprache. Eine Rekonstruktion des Sprachbegriffs Wilhelm von Humboldts auf der Grundlage der Sprachursprungsfrage*. Münster: Nodus.
- Schröder, E. (1889) “Heinrich Theodor Röscher (Art.),” in *Allgemeine Deutsche*

- Biographie*, Vol.29, Leipzig: Duncker & Humblot, p. 380f.
- Siebs, Theodor (1926) *Zur Geschichte der deutschen Hochsprache*. Breslau: Schlesische Druckerei.
- (2013) *Deutsche Bühnensprache - Hochsprache*. Bonn: Albert Ahn, 1922. Repr. Paderborn: Salzwasser.
- Stukenbrock, Anja (2005) *Sprachnationalismus: Sprachreflexion als Medium kollektiver Identitätsstiftung in Deutschland (1617-1945)*. Berlin and New York: De Gruyter.
- Trabant, Jürgen (1990) *Traditionen Humboldts*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- ユルゲン・トラバント (2001) 『フンボルトの言語思想』(村井則夫 訳) 平凡社。
- 山崎明日香 (2014) 「1830年頃の朗詠術の変化について——エドアルト・デフリーントの『ドイツ演技術史』を手がかりに」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科研究紀要) 第31巻, pp.119-127.
- Weithase, Irmgard (1961) *Zur Geschichte der gesprochenen deutschen Sprache*, Vol.1, Tübingen: Max Niemeyer.
- Wolff, Pius Alexander (1827) “Bemerkungen über die Stimme und ihre Ausbildung zum Vortrag auf der Bühne,” in Karl von Holtei, *Beiträge zur Geschichte dramatischer Kunst und Literatur*, Vol.1, Berlin: S.J. Josephy, pp.9-22.
- Walzel, Oskar (1919) “Geleitwort,” in Heinrich Theodor Rötcher, *Die Kunst der dramatischen Darstellung*. Berlin: Erich Reiß, pp.IX-XVI.

Abstract

Beginning in the late eighteenth century, the purification and standardization of actors' spoken language were promoted in the German theater in an attempt to achieve a “pure” language, unmarked in terms of dialect, due to the increase of language nationalism and the nature of theater actors' work in various regions of the country. In the early twentieth century, the pronunciation used by actors was brought to the political and cultural public platform, and it became a model for the standard language taught in national language education.

Under this circumstance surrounding theater culture, the theater critic Heinrich Theodor Rötcher integrated in his drama theory, which is outlined in *The Art of Dramatic Performance* (1841-1846), his view on language for actors, which was based in part on Wilhelm von Humboldt's contemporary philosophy of language. This paper investigates the influence of Humboldt's theory on Rötcher's view in connection with the three themes “articulation and nation,” “purification of sound,” and “mastery of articulated sound.”

Alongside the development of public-national subject formation for actors in the nineteenth century, Rötcher attempted, not only to theorize stage language as a socio-cultural and even national ideal and aesthetic sign, but also to stabilize the function of actors as acoustic media generating meanings and ideas, in order to expand on the phonocentric view of the importance of the stage performance.